

学 位 論 文 題 名

韓国における青果物卸売市場の現段階的特徴に関する研究

－日本との比較を視点に－

学位論文内容の要旨

本論文の課題は、青果物を中心に、韓国の卸売市場の現段階的特徴を解明し、今後の韓国卸売市場の展開方向を示すとともに、今後のあるべき政策展開の方向性を提示することにある。なかでも、韓国がモデルと仰いだ日本の卸売市場制度との比較検討を念頭に置きつつ、制度と実態との乖離、すなわち「非」制度的流通の実態とその存続要因を解明することに論文の重点を置いている。

まず序章では、研究課題に関連した既存の研究動向を整理し、分析の方法を提示した。韓国の卸売市場研究では、卸売市場の現段階的特徴を産地から小売商までの流れの中で把握し、また、日本の卸売市場制度との比較をも視野に入れて分析することは残された課題である。そこで、本論文では、既存文献や統計資料を整理・分析するとともに、実態調査を通じ、韓・日比較という視点を持ちながら課題に迫ることにした。

第1章では、韓・日両国の卸売市場政策の変遷過程を概括した上で、卸売市場を規制する現行法（韓国「農水産物流通及び価格安定に関する法律」、日本「卸売市場法」）の比較検討を行った。

韓国の卸売市場制度は、日本の制度をモデルとしてきただけあって、両法の諸規定は酷似している。しかし、文面上の類似性とは裏腹に、両国の法の実際の運用、政策展開は大きく異なっている。そうした相違をもたらした理由として、①法が制定・施行された歴史的時点の相違、②卸売段階の諸商人の活動や公設市場以外の諸市場の存在の強弱、③産地集出荷体制の整備、④小売構造の相違を指摘した。

第2章では、日本における青果物流通における環境の変化と、卸売市場における取引形態の変化について考察を加えた。

日本では、大型共販体制が形成され、量販店が青果物流通の小売段階をほぼ掌握するに至っている。こうした中で、指値委託や事実上の「買取集荷」などが広範に展開し、また、先取りが広く深く浸透してきた。さらに、産地－卸売市場－小売業者を結ぶ情報システムの整備に対応して、予約相対取引、事前予約取引などの新たな取引形態が導入されてきた。それらの取引形態は、セリ・入札という卸売市場の取引原則を形骸化し、また、商流＝価格形成と物流との分離を通じて、卸売市場の「総合食品流通センター化」への道を開くものである。

第3章では、既存資料と現地聞き取り調査によって、韓国の青果物流通環境、特に産地流通の特徴と、中央卸売市場の管理及び取引システムの特徴を明らかにした上で、同国の中央卸売市場が今日抱える諸問題を解明した。

韓国の青果物生産の零細性や農家労働力不足は「青田販売」を広範に存続させている。また、共同出荷組織や産地流通情報システムの未発達などは仲買人の産地集荷活動を活性化させている。産地収集商は、生産者の要求に応じて先渡金を渡すなど強力な産地収集活動を展開しており、「青田取引」は白菜・大根出荷量の実に90%にも達している。それが卸売市場内に持ち込まれ、卸売市場の取引システムや価格形成機能を大きく歪めている。さらに、市場開設時、類似卸売市場の諸商人を一括して入場させたことが遠因となって、市場内では法的根拠のない様々な商人や荷役労働組合が活動している。この結果、流通費用の増大や卸売市場機能の低下を招き、さらに交通混雑や膨大なゴミ発生などをもたらしている。こうした諸問題をいかに解決していくかが、今日の韓国卸売市場に課せられた大きな課題である。

第4章では、問題が最も顕著に現れている白菜・大根を中心として、ソウル可楽洞卸売市場を対象に、中央卸売市場の取引の実態、特に仲買人および「中販」の存在の背景と機能について考察を加えた。

可楽洞中央卸売市場は、旧龍山卸売市場の構成員をほぼそのまま移転させる形で発足した。そこでは委託商制度（問屋制度）が一般的で、委託商は産地からの委託・買い取りによる収集活動に専念し、分散機能は中間卸売商・小売商が担当していた。この委託商が仲買人となり、中間卸売商・小売商が「中販」となったのである。韓国の現状においては、産地集出荷の未整備と小売構造の零細性が、委託商（仲買人）と「中販」の存在を必要不可欠としているのである。「中販」は、無選別で集荷された青果物の洗浄、規格化、パック詰めなどを労働力不足に悩む小売店に代って行っている。その意味で、委託商や「中販」は、産地農家や小売店の抱える諸矛盾を解消し、青果物流通の円滑化に大いなる役割を果たしているのである。このような現状を鑑みたとし、実態を法律に無理に合わせようとするのではなく、そのための前提条件を整備しつつ、むしろ法律を実態に即したものに改めていくことが必要とされる。

終章では、これまでの各章を要約した上で、指摘された諸問題に対して、政府や市場関係者が打ち出している最近の対策を詳述するとともに、今後における韓国卸売市場の基本的方向を提示した。

韓国では農業労働力の流出・高齢化が進み、大型共販組織が成立する素地に乏しく、農村部での洗浄、規格化、パック詰めなどの条件形成も当面は難しい。こうした中で、広範な農家によって零細な規模で生産されている白菜、大根、キャベツなどの大量需要品目において、産地収集商による「青田販売」を含む買取集荷が一般的な姿にならざるを得ない。他方で、買取集荷と厳格なセリ・入札取引が適格的でないことはいうまでもない。また、小売商業構造の圧倒的な零細性は、「トラック単位」などという大型卸売市場の「大量取引」と矛盾する面が強く、規格化・調整・包装などの諸労働を代行する力能にも欠ける。以上のような韓国の実態を踏まえるならば、「セリ・入札」を唯一の取引形態とするのではなく、買取品には相対取引を認め、また、市場の「大量取引」と

小売商業構造の零細性という矛盾を解決する、すなわち二次的な分散過程（規格化・調整・包装などの諸機能を含む）を担う多様な業者を、指定卸売法人・仲卸売人・売買参加人など正規の業者とともに認める必要がある。そもそも「卸売市場原則」は、普遍的なものではなく、その国の実情に合わせ、柔軟かつ創造的に適用すべきものである。要は、韓国の生産・出荷構造、消費・小売商業構造に適合的で効率的な卸売市場を創っていけば良いのである。そこに、韓国における青果物中央卸売市場の展開の方向性があるといえよう。

# 学位論文審査の要旨

主 査 教 授 三 島 徳 三

副 査 教 授 黒 河 功

副 査 助 教 授 飯 澤 理 一 郎

## 学 位 論 文 題 名

### 韓国における青果物卸売市場の現段階的特徴に関する研究

#### －日本との比較を視点に－

本論文は、序章、終章を含め6章からなる総頁数142ページの和文論文である。図16、表34、参考文献250編を含み、他に参考論文4編が添えられている。

本論文は、青果物を中心に韓国の卸売市場の現段階的特徴を解明し、同国における今後の卸売市場の展開方向を示すことを課題としたものである。中でも、韓国がモデルにした日本の卸売市場制度との比較を視野に入れ、制度と実態との乖離、とくに韓国における「非」制度的流通の実態とその存続要因を解明することに分析の重点が置かれている。論文は以下のように要約される。

まず序章では、研究課題に関連した既存の研究動向を整理し、現在における研究の空白部分を指摘すると共に、分析の方法を提示している。

第1章では、韓・日両国の卸売市場政策の変遷過程を概括した上で、卸売市場を規制する現行法（韓国「農水産物流通及び価格安定に関する法律」、日本「卸売市場法」）の比較検討を行った。韓国の卸売市場制度は、日本の制度をモデルとしてきたため、両法の諸規定は酷似した内容を持っているが、法の実際的運用、政策展開は大きく異なっている。そうした相違をもたらした理由を考察し、①法が制定・施行された歴史的時点の相違、②卸売段階の商人や公設市場以外の市場の強弱、③産地集出荷体制の整備、④小売構造の相違、を指摘した。

第2章では、日本における青果物流通環境と、卸売市場における取引形態の変化について考察を加えた。日本では、大型共販体制が形成され、小売段階では量販店がほぼ掌握するに至っている。こうした中で、指値委託や事実上の「買取集荷」などが広範に展開し、さらに産地－卸売市場－小売業者を結ぶ情報システムの整備に対応して、予約相対取引、事前予約取引など新たな取引形態が導入されてきた。それらの取引形態は、セリ・入札という卸売市場の取引原則を形骸化し、さらに商流と物流との分離を進めている。

第3章では、既存資料と現地聞き取り調査によって、韓国の青果物流通環境、特に産地流通の特徴と、中央卸売市場の管理及び取引システムの特質を明らかにした上で、同国の中央卸売市場が今日抱える諸問題を解明した。韓国の青果物生産の零細性や農家労働力不足は、生産者の「青田販売」と産地収集商の活発な活動を存続させている。「青田取引」は、白菜、大根では出荷量の実に90%にも達し、それらの買取品が卸売市場内に持ち込まれ、市場の取引システムや価格形成機能を大きく歪めている。更に、市場開設時、類似卸売市場の諸商人を一括して受け入れたことが遠因となって、市場内では法的根拠のない様々な商人や荷役労働組合が活動している。この結果、流通費用の増大や交通混雑、さらには膨大なゴミの発生など問題が多発し、その解決が迫られている。

第4章では、ソウル可楽洞中央卸売市場を対象に、問題が最も顕著に現れている白菜、大根を中心として、卸売市場取引の実態、特に仲買人および「中販」の存在の背景と機能について考察を加えた。可楽洞市場は、委託商（問屋）制度が一般的であった旧龍山卸売市場の構成員をほぼそのまま移転させる形で発足した。委託商は産地からの委託・買い取りによる収集活動に専念し、分散機能は中間卸売商・小売商が担当していた。可楽洞市場では、この委託商が仲買人となり、中間卸売商・小売商が「中販」となり、卸売市場の重要な構成者となった。とくに、「中販」は、無選別で集荷された青果物の洗浄、規格化、パック詰めなどの作業を、労働力不足に悩む小売店に代って行い、青果物流通の円滑化に大きな役割を果たしている。

韓国の青果物卸売市場に関する以上の解明を踏まえ、終章では、指摘された諸問題に対して、韓国政府や市場関係者が打ち出している最近の対策を詳述するとともに、今後における韓国卸売市場の基本的方向を提示した。韓国では、農業労働力の流出・高齢化が進み、共販組織の形成や、産地での洗浄、規格化、包装等の条件に乏しい。加えて白菜、大根などの品目では、零細多数な農家による生産が行われており、産地収集商による買取集荷が一般的にならざるを得ない。以上のような韓国の実態を踏まえるならば、「セリ・入札」を卸売市場における唯一の取引形態とするのではなく、買取品には相対取引を認め、また、市場内では二次的な分散過程（規格化・包装などを含む）を担う多様な業者を、指定卸売法人、仲卸売人など正規の業者と共に認めることが必要であるとして、韓国の実態に合わせた弾力的な制度の運用を求めて、本論を結んでいる。

このように本論文は、韓国の青果物卸売市場を対象とした研究において、これまで未解明であった部分に対して多くの新知見を加えた。これは学術上高く評価されるのみならず、同国の卸売市場政策に対しても貴重な提言となっている。

よって、審査員一同は、最終試験の結果と合わせて、本論文の提出者・崔東柱は博士（農学）の学位を受けるのに十分な資格があるものと認定した。